

## 杉本正・岩城禮三 教授退職記念号によせて

札幌学院大学人文学部長  
人文学会長 中野 徹 三

98年春、私たちの学部は、人間科学科の三先生とともに、英語英米文学科の発展と充実に多大の貢献をされた二人の先生をお送りすることとなった。

杉本正先生は、私たちの人文学部のみならず、本学50周年の歴史を、その創成の時点から身をもって生き抜いてこられたただひとりの方、といてよい。

先生は終戦の年に滝川中学校を卒業後、翌1946年本学の母胎となった札幌文科専門学院文科が開設されるやその第一回生として入学された。当時、本道には小樽経済専門学校を除いて文系の高等教育機関が無く、復員学徒多数を含む青年男女は、文化への燃えるが如き憧憬を胸に、中島公園池畔の古い木造校舎（本学の建学記念館は、この建物正面のイメージを再現したものである）に集まったのであった。当時の杉本青年を彷彿させる一齣として、『学園40周年記念誌』は、文専開学の年の秋に開かれた創立記念祭において、「文科の学生杉本正は、ゲーテと百田宗治（当時文専教授）の詩を朗読した」と伝えている。

先生は、文専を卒業後、慶応義塾大学文学部文学科に入学、英米文学の研究と詩作に没頭された。1952年に同大学を卒業後、先生のいわゆるしばらくの「放浪期」を経て1956年、文専が昇格して誕生し、本学の母胎となった札幌短期大学に助手として着任され、以後一貫して本学園と苦難と喜びを共にしつつ、42年の星霜を歩んでこられたのである。

この間、札幌商科大学を開設するという大きな仕事を私たち当時の同僚と共に担い、さらに私たちの学部の開設に際しては、札幌短期大学英文科の蓄積を基礎に4年制の英語英米文学科へと発展させるべく、人事にカリキュラムに、八方の努力を尽された。私は今なお杉本先生と二人である英文学者のお宅を探して、当時はまだ緑が残っていた練馬区の畑の中の道を、疲れ切ってあちこちとさまよっていたある秋の日のことを、道筋の柿の実の鮮やかな彩りといっしょに、懐しく思い出す。

人文学部開設後、先生は長く英語英米文学科の学科長として、新設間もなく、問題山積の同学科の取りまとめと、その充実のために努力を傾けられた。また、1985年から4年間は、人文学部長として、最晩年の95年から3年は本学学長としての重責を担われている。

これらの連続した学部と学園の課題と、先生の必ずしも十全とはいえない健康状態が、先生の自由なるべき研究生活に重い負担をお掛けしたことを、私たちは銘記して先生に謝しなけれ

ばならないであろう。

しかし、先生の本領は、まさに詩と詩論にあり、奔放な天才詩人ディラン・トマスについての先生の一連の研究は、この分野でのわが国のすぐれたパイオニア的労作とされる。そして先生は、最近のお電話によれば、自由人となられた今、イギリスの近現代詩についての年末の御研究を近く上梓されるべく取り組んでおられるとのことであり、旧来の友人の一人として、誠に慶賀にたえない。願わくば先生の益々のご健勝が、今後の先生のライフワークの豊かな結実をお守り下さいますことを、学部教員一同とともに、ご祈念申しあげる次第である。

岩城禮三先生は、1930年岩内郡岩内町にお生まれになり、旧制岩内中学校を卒業されたのち、小樽経済専門学校に入学され、1949年同校を卒業された。その後、郷里の岩内高校で英語教諭としての教鞭を取られるかたわら、1956年には日本大学文学部英文学科を卒業されている。

1961年以後、9年にわたって札幌旭丘高校教諭を勤められたが、1970年に小樽商科大学短期大学部助教授に着任されて以来、大学での英語教育の道に進まれ、15年間にわたる札幌医科大学教授としてのご勤務ののち、1995年から本学人文学部英語英米文学科の教授として着任された。

半世紀に及ぶ先生の英語教育についてのご研究と実践上の多大の成果は、この道の識者が一致して認められるように、本道のみならず全国の英語教育界に岐出する巨峯となっている。

先生は、旭丘高校在職中にハワイ大学・ジョージタウン大学大学院の外国語教育学課程を修了されたが、この間同大学より研究・交流活動に対して Professional Award を受賞されておられる。また、小樽商大で英語を教授されるかたわら、1969年から7年間にわたって道立教育研究所語学教育研究室長を勤められ、93年には北海道英語教育研究会から北海道の英語教育への貢献により感謝状を授与されめるなど、いずれも先生の広く深い英語教育学上の学殖を物語るものである。

したがって私たちが岩城先生から親しく学び得た期間は、けっして長いものではなかったが、先生はご自身の貴重なご経験を生かして改革の道を模索しつつあった本学部の英語英米文学科に対し、非常に貴重なアドバイスの数々を与えて下さり、また身をもって次代を開く先導の役をも果して下さった。一昨年秋の、本学部20周年記念行事のひとつとしての英語教育についてのシンポジウムの成功も、岩城先生の豊かな人脈とアイデアによるところ多大であったことを、私たちは忘れてはいない。

そして先生は今なお、北海道文教大学開設準備委員として、英語教育の新しい拠点の開発に情熱を燃やされておられる。先生の今後の益々の御健勝と、末長いご活躍とを、改めて切に祈念して、結びとしたい。